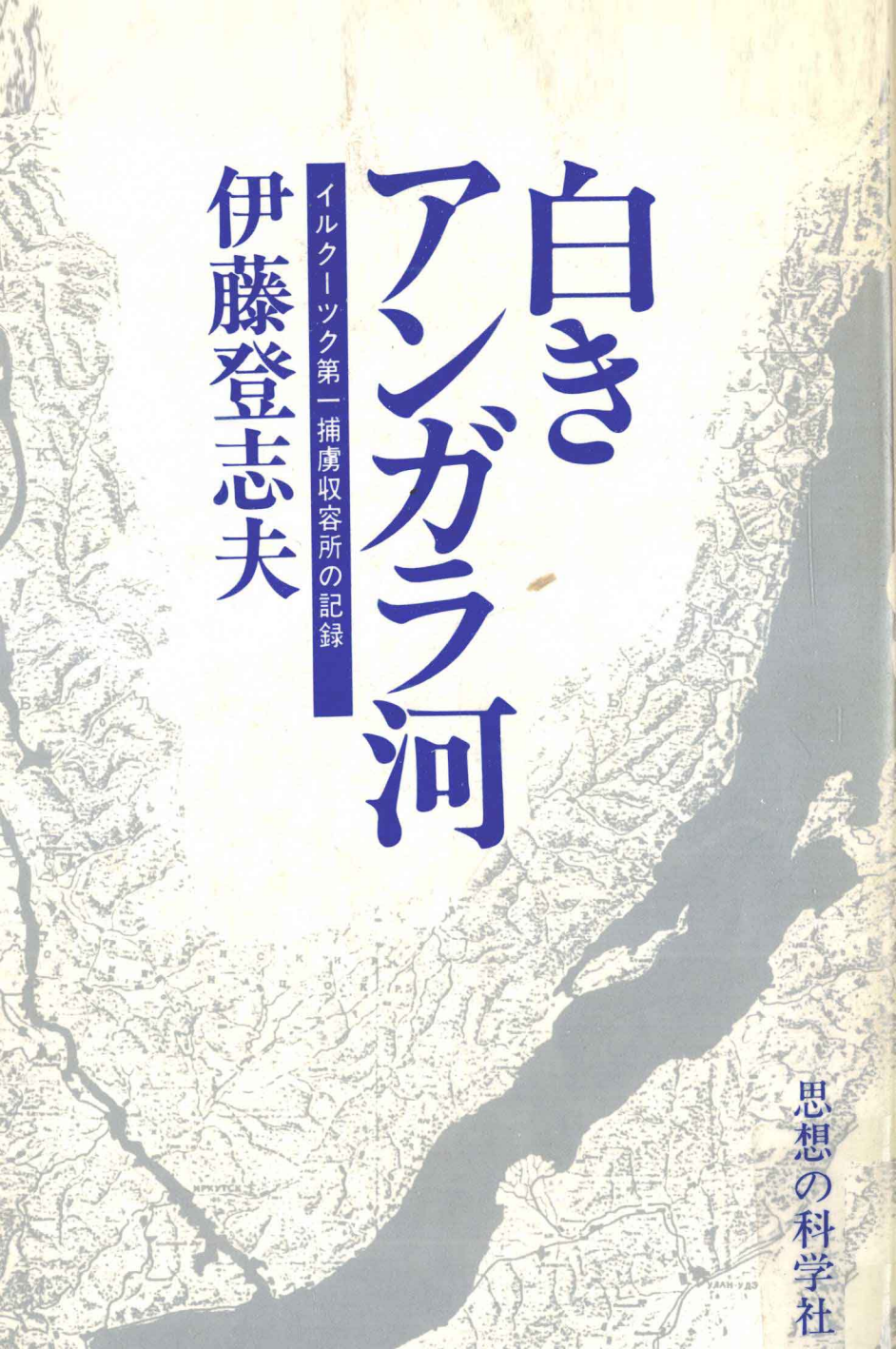


The background of the cover is a detailed, sepia-toned map of a mountainous region, likely the border area between China and Russia. The Amur River is prominently featured, winding through the landscape. Various geographical features, including mountains, valleys, and settlements, are depicted with fine lines and shading. The map is oriented with North at the top.

白き アムガラ河

イルクーツク第一捕虜収容所の記録

伊藤登志夫

思想の科学社

白き アンガラ河

イルクーツク第一捕虜収容所の記録

伊藤登志夫

思想の科学社

伊藤登志夫（いとう・としお）略歴

伊藤俊郎（本名）

一九二三年 青森県野辺地町に生まれる。

思想の科学研究会会員。

著書『共同研究 集団』（共著 一九七六年 平凡社）

連絡先

東京都中央区銀座2-9-4 銀座館312号
NAC内 アンガラ会事務局 大塚勇
電話 東京(03)561-5895

白 き ア ン ガ ラ 河

イルクーツク第一捕虜収容所の記録

著者

◎伊藤登志夫

人

森山次夫

思想の科学社
都文京区後楽二-一六-二

座 ○三一八一三一七四五
東京五一八九〇七二

松沢印刷
豊文社

九年八月三十一日 第一刷発行

定価 千二百円

白きアンガラ河

目次

プロローグ 一九四五年夏 5

イルクーツク第一捕虜収容所 39

門の前で 41

飢えと寒さ 47

暗い冬 67

「日本新聞」 73

民主運動のはじまり 83

ソフホーズにて 102

麻雀とまんとう 120

劇団 134

つるし上げ 142

労働の日々 165

春 176

「杏の花」 188

帰る人帰れぬ人 195

エピローグ 「アンガラ会」 そして シベリア再訪 207

あとがき

参考文献 247

「杏の花」楽譜 252

参考地図 254

装幀 伊藤登志夫
装画 大塚 勇

死せる友と

生きて歸った友へ

プロローグ

一九四五年夏



その未明、国境線の方向の暗い空に遠い地鳴りのように雷鳴がはためいていた。

ソ満国境から約八十キロの距離にある虎林の町は、まだ夜のまどろみの中にあった。記録によれば、その時刻国境では豪雨が降りつづき、稲妻が走り、森や河や平野を時々鋭く照らし出していた。だが幾棟かの兵舎や倉庫、偕交社など、軍関係の建物のほかはわずかな民家が低く地に這っているだけの満州国（中国東北部）内のこの町では、雨の気配はなかった。数時間たてば、真夏の大陸の平野は昨日のように穏やかな朝をむかえるはずだった。

しかし、そのときすでに異変は始まっていたのである。遠い雷鳴と聞えた中には、砲撃のひびきもまじっていたかもしれない。

一九四五年八月九日、午前零時。

その時間を期して、満を持していたソ連極東軍は、東部、北部、西部の広大な戦線でいっせいに国境を突破し、満州国への侵攻を開始したのである。

当時、ほくは満二十二歳、現役の陸軍衛生上等兵だった。

青森県のある町に生まれたぼくは、土地の高等小学校を卒業すると、東京にいた伯父を頼って上京、出版社で見習いのような仕事を数年つとめた後、現役で郷里の部隊に入隊し、満州に連れて来られた。そして、宝清、東安等北満を数箇所転属した後、満州第一方面軍第五軍第一三五師団第三六八聯隊に所属し、このとき虎林に駐屯中だった。

その夜、連日の演習にくたびれて、兵舎の寝台で泥のように眠りこんでいたぼくは、とつぜん誰かに足のあたりを蹴とばされて目が覚めた。

「非常呼集！」

「起きろ！ 非常呼集だ！」

その叫びにたちまち営内は騒然とする。半睡半覚のもうろうとした頭で、眠気をふりはらいながら起き上がり、灯火管制のうす暗い中で手早く軍衣袴を身につけ、軍靴をはく。遠くラッパの音がひびいてくる。

（また、夜間演習か……やれ、やれ……）うんざりした耳に、

「早くしろ！ 武装して営庭に整列！ ソ連軍が攻撃してきたらしいぞ！」

という声で、今度こそは、はっ！ と目がさめた。

身支度を終え、ずっしりと重い銃を手にした兵隊たちは、蝗のように次々と営庭にとび出す。外はまっ暗だが星空なので、となりにいる戦友や上官の顔が識別できぬほどではない。営庭に渦巻いていた黒い人影の流れとざわめきがやっと静まり、中隊毎の整列が終ると人員点呼。そして遠い暗闇の中

から、くぐもって聞きとりにくい部隊長の声がひびいてくる。

「ただ今より命令を達する。本朝、虎頭方面のソ連軍は、わが軍に対し攻撃を開始した。部隊はただちに戦闘準備を完了すべし」

軍隊の命令はいつも文語調で、簡単なのですぐには意味をとらえにくい。だが、このとき、その聞きとりにくい言葉は電流のように胸を貫いた。その日がついに来たのだ。

国境配備部隊の任務は、強大なソ連軍の侵入を防ぎ、その地で玉碎することである。その戦争がいっ始まるかは誰にもわからなかった。明日にも始まるかもしれないし、将来とも何事も起らないかもしれない。ただ、いったん戦争が勃発すれば、ぼくらの生命の抹殺をとまうだろうことは、ほぼ確実だった。それはかりに回避したいと思っても個人の力ではどうにもできない「運命」だった。それは始めから個人の喜怒哀楽の感情を超えている。その日がついに来たのだ。

だが一瞬の悲壮感と共に、奇妙な活気がぼくの中に湧いていた。新しい事態への対応は何事によらず人を生き生きさせるものである。少くとも戦争は、兵營生活のうんざりさせる「日常」からの脱出を予告していた。ぼくにとって軍隊は、すでに耐えがたいものになっていたのである。

現役兵として郷里の部隊に入隊する際、おそらく当時の多くの青年たちと同じように、ぼくは、よい兵隊になろうとまじめに考えていた。

精強な兵にはたといなれないとしても、人には劣らぬよう努めようというひそかな決意もあった。だが入隊して間もなく、そうした個人的な感懐やある種の「善意」は、反逆心とか怠惰といったそれ

らとは多分反対の価値概念と同様、軍隊にとっては何の意味も持たないことを思い知らされた。

ここでは個人が何を考えていようと、それはほとんど問題にならなかった。すでにこれまでの社会生活の中で築きあげられた自我をいったん完全にたたきつぶし、私的な意志や判断などを無化して、完全な「機械」につくりかえること——それが軍隊教育だった。そしてその教育手段の最も重要なものが、暴力だったのである。

最初にぼくが驚かされたのは、一九四四年一月、初年兵として東満に渡り、宝清の部隊に入隊したときのことである。そこで見た現地召集の補充兵たちの姿は悲惨なものだった。三十歳をこえて民間ではひとかどの地位にあった人々にもかかわらず、今ではそのつぎはぎだらけの軍服は泥と油で汚れ、顔はぼつとりと瘤のように変型し、みみず腫れができていた。古兵たちになぶりものにされ、絶えずビンタを食うせいである。いつでも腹をすかせきっていて、食事後古兵の残飯がバケツの中に集められると、捨てに行くふりをして物影にかくれ、数人が手づかみであわてて喉に流しこむ。それはどう見ても乞食の群だった。

だが同じ班内には、彼らとまったく対照的な種族がいる。それは軍隊の飯を長く食った兵長、上等兵などの古兵だ。彼らはそろって体格がすぐれ、服は倉庫から出したての新品で、靴も初年兵がピカピカにみがきあげたものだ。いつも煙草をすいながら悠然と寝台に寝ころび、初年兵たちを怒鳴りつけ、その右往左往を面白そうに見物している。その場景に呆気にとられていたぼくらも、翌日からは他人ごとではなかった。腹を空かせ、殴られ、駈けずり廻る日常が始まったのである。

毎日毎晩、ことに夜の点呼後内務班において古兵による初年兵の「教育」が行われる。それは制裁

されるべき何の理由もないのに襲いかかる暴力の嵐だった。平手や拳による殴打は、まだタカが知れている。上靴の固い革底でなぐられ、帯革（ベルト）でなぐられた。駄馬を打つ鞭で力いっぱい打たれると、鞭の当たった道なりにみみず腫れが一筋、みるみるうちに頭のとっぺんから頬にかけて走った。木刀でなぐられて昏倒した者もいた。それは人間を扱うやり方ではなかった。軍隊内務書にいう「兵營ハ苦楽ヲ共ニシ死生ヲ同ウスル軍人ノ家庭ニシテ……」というタテマエとは天と地ほどに異なつた現実だった。

こうした「教育」は、軍隊が黙認するものではあつても、公認し、積極的に奨励したものではなかった。「私的制裁禁止」の通達が時折り出されたようだったが、それは一度として守られなかった。「教育」は古兵たちの陰湿な慰みであり、いつまでも除隊できないうつぶんばらしという性格が強かった。だが由来や意図はどうであれ、軍隊は無法地帯だった。

毎日の陰惨な初年兵いびり。日常の分秒まで規定される監視体制。横行する「員数合わせ」という名の盗み。上級者の私腹ごやし、欺瞞……。そうした日々の中で、人間は抵抗力を失ない、感情は鈍麻し、命令だけに反応する機械と化してしまふ。

半年の第一期検閲が終り、陸軍病院に転属して部隊以上の陰惨な衛生兵教育をすませ、進級して一等兵から上等兵になると、ぼくの軍隊生活もいくらか楽になっていた。

ぼくは軍隊生活について、嫌悪感を抱かざるをえないような経験しか持っていない。だが「軍隊はど楽で、おもしろいところはない」と公言し、そのように感じた人々もかなりいたことは事実である。あと一、二年も軍隊の飯を食べば、あるいはぼくも自然に特権階級の一員に成り上がり、多くの古兵

同様けちな私腹ごやしでもしたかもしれない。その可能性も、ないとはいえなかった。だが軍隊は、ぼくにはどうにも性格的に「水」に合わなかったらしい。

しかし軍隊に嫌悪感を抱いたとはいっても、それはそれだけのことだった。ぼくはそれを「運命」として受けとっていた。開戦の知らせは、この不愉快な軍隊の日常生活からの解放という一瞬の幻影を垣間見せたのである。

そして、この日。

戦後公刊された諸種の資料によれば、事態は次のようだった。

満を持して侵攻を開始したソ連極東軍の兵力は、兵員百五十七万人、火炮二万六千門、戦車自走砲五千五百輛、飛行機三千四百機という歴大なものだった。極東軍総司令官はワシレフスキー元帥。東部国境方面担当の第一極東方面軍司令官はメレツコフ元帥、北部方面の第二極東軍司令官はブルカエフ大將、西部からのザバイカル方面軍司令官はマリノフスキー元帥。そして第一極東方面軍主力の任務は、興凱湖南方の、綏芬河と向きあうグロデコーボ付近から国境を突破し、牡丹江方面にむかって主要打撃を加えることである。

また、はるか北方の虎頭虎林方面には、ウスリー江をはさんでザフバターエフ中將麾下の第三十五軍が配置されていた。この部隊は主力をもって虎頭要塞を占領し、その後勃利に進撃するのを当面の任務とする。これがぼくらの直接の敵となったわけだ。

午前零時の開戦の時刻になると、この部隊は対岸のグベロヴォとレザヴォドスク地区から制圧砲撃

を国境最前線の虎頭に加え、さらに空軍による爆撃でたたいてから、ウスリー江とその支流スンガチ川の渡河にかかる。河幅は広いし、波は高い。そして折柄の豪雨のため水量が増しているの、渡河は予想外に難渋したらしい。だが対岸にとりつくと、この部隊は主力をもって虎頭要塞を攻撃するとともに、別動隊はそのまま満州内にまっしぐらに侵入する。

虎頭では第十五国境守備隊が駐屯していたが、一九四一年（昭和十六年）の関特演（関東軍特別大演習）当時の一万人近い兵力がだんだん削減されて、わずかに歩兵四箇中隊と歩兵砲、速射砲、それに砲兵二箇中隊と工兵隊、計一千四百名が残っているだけだった。さらに折り悪しく隊長西脇武大佐が出張で不在という不運も重なったが、大木正大尉が隊長代理として指揮をとった。そして、狙撃兵を主とした歩兵一万と重砲約六十門、戦車や飛行機を含む優勢な敵重装備機械化兵团を相手に壮絶な戦闘をくりひろげたが、衆寡敵せず、八月二十六日（ということは終戦後十日も戦いつづけたということだが）ごろまでに相次いで玉碎し、要塞からの脱出生還者はわずか五十余名にすぎなかった。この経緯は『秘録 北満永久要塞』（岡崎哲夫 秋田書店 昭和三十九年）にくわしい。

だが虎頭の攻防は別として、ソ連軍は国境に点在する一つ一つの要塞や陣地を相手にすることはしなかった。後方に取り残された要塞の料理は後まわしにし、広い戦線の陣地と陣地の間を、なんの抵抗を受けることもなく通りぬけ、まっすぐ満州中央部に向かって進撃する。

砲や兵力が充分にあれば、各陣地のすき間は弾幕でおさえ、ソ連軍の通過を拒否することもできるのだが、南方の戦局が悪化して以来、砲はほとんどが内地へ持ち去られ、兵力も最盛時の六分の一という劣勢では、なすすべはなかった。

ふたたび、わが部隊のことに返る。営内は戦闘準備の騒然たる中であつた。平常は衛兵が厳重に警戒し、近づくことをゆるされない弾薬庫も、さらに被服庫、食糧倉庫も、扉がいっぱいに開かれ、つめかけた各中隊からの受領兵でごった返す。支給された装備を身につけると、それは意外なほどの重さになったのでおどろいた。小銃、数百発の実包、数日分の食糧をおさめた背囊、雑囊、衛生兵としての医薬品をつめこんだ繃帶囊、それに鉄帽、ガスマスクなどである。この重量でいったい何キロ歩くことができるだろうか。ふっと不安が浮ぶ。

だが、じっさいにはぼくらはこの装備のまま、この日から半月間にわたり、約五百五十キロを踏破することになるのである。

この時刻までに、わが部隊が知りえた敵状は、おそらく言うに足りないものであつたろう。軍の中樞である新京（長春）所在の関東軍總司令部自体、敵状把握に懸命だつた。まして辺境にある出先の一部隊が、皆目不明な状況の中に投げ出されていたことは当然であつた。部隊はとりあえずの措置として、山川徳助准尉を長とする騎馬斥候を出し、前面の敵状をさぐることにつとめている。だが、偵察機が空から敵の兵力と動きを観察するとは違って、視野と行動範囲の限られた騎馬斥候では、多くの成果をあげることができなかった。

なお、このときわが部隊は、三週間前の七月十六日に編成を完了したばかりであり、その総員は三千四百九名となっているものの、このうち主力は、後方の牡丹江に近い七星の陣地構築に出かけていたため、虎林には一千名程度の兵が残っていたにすぎない。

ぼくらはその朝、完全軍装で灼けつく夏日の下に息をあえがせ、上衣の外まで汗でぐっしょりと濡